

Walking Heart

ウォーキング・ハート

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東方 愛、17歳。エジプトに行くことになりました。

おバカな少女がなんやかんやでスターダストクルセイダーズに加わってDIOを倒しに行く話。

スタンドは八部で弱い弱いと言われている、あのスタンドを強化したものです。

目次

調子に乗ると失敗する

「万年筆ですって!?　これが万年筆に見えるの?　なんて頭の悪い子たちなんでしょうッ!　ガボボボボ……それじゃあよく見なさいッ」
「うぎやああああああ!!」

—— 一体全体、なぜ自分はこんなことに巻き込まれているのだろう……

そう、良く考えれば今日は朝から散々だった。玄関で躓くし、お弁当は忘れるし、具合が悪くなったから保健室で休んでいたら不良が3人もやってきた。そしてそのうちの1人はあの悪名高いジヨジョと空条承太郎だ。彼はモデルの様に外見が整っていてクールでかっこいい男だが、遠くで見たいタイプのイケメンだった。自分が保健室で休んでいるタイミングで彼が来たので心臓が口から飛び出そうになったが、何とか押さえ込んでベッドの中で静かに身を潜めていたと言うのに……

「その女医にはわたしの幽波紋が取り付いている操っている」

「貴様……何者だッ」

「わたしのスタンドの名は法^{ハイエロファント・グリーン}皇の緑。お前のところにいるアヴドウルと同じタイプのスタンドよ……わたしは人間だがあのお方に忠誠を誓った……だからッ貴様を殺す！」

考え事をしている間に、いつの間にか知らない男子生徒が1人増えていた。しかも、真面目そうな外見なのにあやつり人形を手で弄びながら物騒なセリフを……あの空条承太郎に向かって浴びせているではないか!

(なに……?　よく知らないけど、最近の喧嘩ってこういうクサイセリフ吐きながらするワケ?　ていうか、保健室の先生どうしちゃったの?　いくら不良が気に入らなくても、万年筆顔にぶつ刺すことないのにい!　あたしがいること忘れてんじゃあないの(?!))

ドギョウウウン!

「……うわあくお、人類の夜明けだわこりゃ」

本当に自分がいることを忘れているんじゃないだろうか？ 何を思ったか、突然ジヨジヨが先生の頭を引き寄せて熱烈なキスをしはじめた。……生徒と先生の禁断の恋つてやつなのだろうか？ そんなもの見せつけて、一体何が楽しいんだろうか。白昼堂々キスシーンなんか見せつけて……自分も真面目くんも、先生のストレス発散に付き合わされて片目を失った不良もいるというのに。

そう思つて白い目で見ていたわけだが——何やらジヨジヨの背後から青い肌の人間が現れ、先生の口から緑色の煌めくものを引きずり出したので、思わずベッドから転げ落ちてしまった。しかも、ドスンツと派手な音を立てて尾てい骨を強打するおまけ付き。やっぱり今日はいいことがない日だ……早くお家に帰りた。

「ぎゃあッ！　いてて……あつ、えーと……あ、あなた達もそれ、持つてるんだ！　仲間だねえっつ」

ジヨジヨと真面目くんの視線が、こちらに向けられている。ベッドから落ちたのが恥ずかしかったので誤魔化すためと、敵意を持たれないように自分も仲間だよくという意味を込めての発言だったが、2人とも目を見開いて驚いている様子だ。ジヨジヨにいたつてはその視線に敵意すら感じられる。——もしかすると、失敗したのだろうか。(……えっ？　あたし何かした？　喧嘩の邪魔したから??　やばいなあ、ジヨジヨに目をつけられたらボコボコにされるだろうし、真面目くんも大人しそうな顔して笑顔で首を絞めてきそうな感じがするし。何とかして敵意がないことを証明しないと……)

依然先生の口の中から引きずり出したものの首を掴んでいるジヨジヨと、少し苦しそうな真面目くんに向かって仲間アピールを続行することに決めた。こうなつたら、仲間意識を刺激して気に入られるしかない。本当は関わりあいにはならない予定だったのだが、どうせ目をつけられるのならいい意味での方がいいに決まっている。……女子生徒からの嫉妬をこの身に受けるかもしれないが、仲良くないと出来ないジヨジヨの隠し撮り写真とか秘密の情報とかをばらまいて

生き残ってやる！

そうと決まれば、行動は早いうちに起こすべきだ。背後に生まれた時から一緒にいた相棒を出現させる。

「ほ、ほらあ！　これがあたしのウォーキング・ハート！　ちよつとごつい気もするけど、ハートマークとかあつて可愛いでしょ？」

相棒は藁人形のような外見で目つきも良くないが、女性型だし胸元にチャームポイントのハートマークがついている。この2人の男らしい外見の相棒と比べたら、だいぶ可愛らしくて親しみやすい容姿をしている。

これで仲間意識を持つてくれるはずだ……自分もそうだったが、これが見えるのが自分だけだと気づいた時は随分と悩んだ。友達は多い方だが、本当に心を許せるのは、これが見える人だけだと思う。きつとこの2人もそうだ……だからグレてしまったし、異常な言動をして少しでも気を引こうとするのだ。自分ももっと子供の時は、何とかして他の人にも見えないものかと努力はしたが無理だった。それどころか、努力の度の人から変な目で見られるので諦めたのだ。

ここは自分がカウンセリングしてあげよう。きつと彼らには良き理解者が必要なのだ。おかしなことではないんだよ、ひとりじゃないからね……

「……てめえ、敵か？」

「何でそうなるのよ!!」

慌てて口を押さえたが、既に遅い。なんということだ。あろうことか、勢いとはいえあの空条承太郎に生意気な口を聞いてしまった……いや、でもまだ望みはあるはずだ。皆からジョジョ、ジョジョと慕われているからこういう反応は新鮮なはず。漫画だとかいうタイプは『ふっ……面白いやつだな。このおれにそんな口を効ける女はなかなか居ない。気に入ったぜ』とか言つてなんやかんやで仲良くなるはずなんだ！　その可能性に賭けるッ

「あなた、DIO様の部下では無いですね。だがスタンド使い……始末した方が良さそうだな」

「なんでえく……」

もうダメだ。ジョジョの方は自分にいい感情は持っていないだろうし、真面目くんも始末するとか言っている……こんなことならさっさと早退すれば良かった。

「始末する……2人まとめてだ」

真面目くんがそう言うのと、緑人間の手から何かの液体がポトポトと溢れだしてきた。

……手汗だろうか？ きつとそうだ、あの青年はやっぱり見た目通りの真面目な男の子なのだ。ちよつとした反抗心から始末するとか言ってしまったがやっぱり内心ガクブルで、あんなに凄まじい勢いで手汗が出ているのだろう。ほっこりして、思わず微笑んでしまった。

——だが、すぐにそうでは無いと思い知らされることになる。

「エメラルドスプラッシュ!!」

完璧に油断していたら、いきなり宝石のようなものが物凄い速さで飛んできたのだ。

「ええっ！ ほんとに攻撃するの!? ちよつと待っ……」

言い終わらないうちに、胴体と防御の為に顔を隠した腕に合計で3発ほどが激突してきた。かなりスピードがあるので1発の重みが凄まじく、能力のおかげで痛み全くはないが、派手な音を立ててぶっ飛ばされてしまった。

「おい！ 無事かッ!」

あの手汗攻撃を喰らって負傷しているのにこちらの心配をしてくれるジョジョに、なんだか心が暖かくなった。やっぱり、先程の仲間アピールはこの男には届いていたのだ……不良というイメージが崩れるので表面上はクールな態度をとっていたが、やはり自分という理解者に出会えて嬉しかったのだろう。案外、良い友達になれるかも……そう思うと、こんな状況でも心が弾んだ。

「へーきだよー ほらほら、何ともないー!」

だから調子に乗りすぎてしまったのだ。

能力を解除した状態で、無事をアピールするためにくるりと一回転——それがいけなかった。

「あっ」

ゴチンツ

足を捻って何かで頭を強打して、そのまま意識を失ったのだ。